

カンコクノショウガッコウニオケルタンキシュウ
チュウガタコウセイテキエンカウンター・グループ
ノジッセンケンキュウ : 「フユヤスミノナカマヅク
リキョウシツ」ノジッシジヨウノショモンダイヲメ
グツテ

金, 奎卓
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/890>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.67-74, 2003-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



韓国の小学校における短期集中型構成的 エンカウンター・グループの実践研究 —「冬休みの仲間づくり教室」の実施上の諸問題をめぐって—

金 奎卓 九州大学大学院人間環境学府

Structured encounter group: A practical study of short-term, intensive group in Korean Elementary Schools —The practical problems of the winter Make-friends class—

Gyutag Kim (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This study focuses on the practical problems of the short-term, intensive group structured encounter group in Korean elementary schools. The structured encounter group was tested on 53 elementary school students for 3 days. Through this experience, we could recognize the following problems. 1. Problems related to the constitution of the group. (1) Orientation: it is necessary to collaborate with the organs of education and for teachers to participate in study group about encounter group. (2) Considering the seasons: A matter to be considered is the need for an environment where the students can move freely and to create programs that take the season under consideration. (3) The length of the program: At least 2 days are needed. (4) The necessity of co-facilitator: it is necessary to have a co-facilitator with previous knowledge of the students. 2. Problems related to the process of the group. (1) Following up on students who attended for a day: it is important for the teachers to follow up to be supportive and to keep in touch even after the group exercise has ended. (2) The facilitation: it is important to understand the characters of attended students and to choose the most appropriate facilitation method for them.

Keywords: the short-term, intensive group, structured encounter group, Korean elementary schools, Make-friends class

I 問題と目的

1970年代から日本で行われたエンカウンター・グループ(以下, EG)は, 今までに様々な実践と研究が行われている(野島, 2000a; 國分, 2001)。一方, 1970年代から韓国でもエンカウンター運動が始まり(李ら, 1971), エンカウンター・グループ, 自己成長集団等の様々な名前で実践が行われている(金, 1982; 金, 2002 a)。

これまでの研究をみると, EGは大きく「構成型グループ(以下, SEG)」と「非構成型グループ(UEG)」に分けられている。その中では様々な形態を持ちつつ, 実践が行われている。『時間設定』の観点から見ると, 「集中型」と「継続型」に分けられる。集中型の形態は, UEGが非常に多く行われている(野島, 2000a)が, SEGも増えつつある状況である(國分, 1992; 鎌田, 2001)。対象としては, 高校生以上を対象として行われている場合が多いが, 小学生を対象に集中的に行われたグループは見当たらない。一方, 継続型の形態は, かなり幅広く行われている状況である(野島, 2000a; 國分, 2001)。しかし, 小学生における短期集中型の実践はほとんど行われていない(金, 2002 b)。よって, 小学校における短期集中型グループについて, より研究を積み重ねる必要

があると考えられる。

金(2002 b)は, 小学生37名(5, 6年生)を対象として「冬休みの仲間づくり教室」(SEG)を運営した。その結果, ①子どもは, 自己理解, 他者理解, 深くて親密な人間関係形成の体験ができて, 肯定的自己概念と社会的スキルの変化が起こり, ②日常生活場面で仲間関係づくりができるようになったと報告した。そして, 時期によってグループ運営に差があるだろうと指摘した。よって, 夏休みではない時期に行うことも必要であろう。

これからの課題としては, 小学生対象のSEGに関する研究量を増やしていくこと, とりわけ短期集中型SEGの多様な適用可能性について模索することが必要であると思われる。

そこで, 本研究では, 集中的な体験学習としての「冬休みの仲間づくり教室」(SEG)の実践について報告し, そこで起こった実施上の諸問題を中心に検討することを目的とする。

II グループ構成

1. SEG 実施までの経緯

SEGの紹介にあたっては, 200X年12月中旬の1週間

Table 1
『仲間づくり教室』のスケジュール表

時間	一日目	二日目	三日目
0930-1020	オリエンテーション	第3セッション	第6セッション
1030-1120	第1セッション	第4セッション	第7セッション
1130-1220(40)	第2セッション	第5セッション	第8セッション, 別れの会

に5・6年生14学級560名に『自分を見つめ、友だちと知り合い、たくさんの友達をつくりましょう』という内容の案内状を配り、64名が希望したが、53名(男20名、女33名)が参加した。SEGの紹介は各担任教師の協力を得た。案内状には、冬休みの期間中に事故等安全上の問題があるため、保護者の許可をもらうようになっている。

2. SEGの位置付け

このグループは、200X年の夏休みに行ったグループ(金, 2002b)と同じく、冬休みに『仲間づくり教室』というタイトルで三日間(8セッション, 9時間)、グループ体験学習の一環として行った。メンバーは異学年、自発参加である。グループの形式は、「通い型(短期集中型)」と「オープン・グループ」である。

3. グループ編成

対象は、5-6年生(韓国のD市のP小学校5年生男16名、女26名、計42名; 6年生男4名、女7名、計11名; 合計53名)であり、参加人数は平均40.33名(SD=9.71)(1日目: 51名, 2日目: 38名, 3日目: 32名)、年齢は10-11歳であった。そこで参加日数における人数は、1日間のみが14名、2日間が10名、3日間が29名であった。ファシリテーター(以下Fa)は30代前半(男性)とコ・ファシリテーター(以下CoFa)は30代後半(女性)と30代前半(男性)であった。

4. スケジュール

3日間のスケジュールはTable 1の通りである。

5. 場所

場所は、5年生の一番広い教室(約25m²)と運動場が用いられた。

6. リサーチ

参加者は、グループの参加前後の感想文、毎セッション後のふりかえり用紙への記入と2ヶ月後のFollow-up感想文の記入が求められた。ふりかえり用紙の内容は、次の通りである。I自己評価=①今日の活動は楽しくで

きましたか、②今日の活動で自分の考えや感想を言うことができたか、③今日の活動で他の人の話を聞くことができたか、④今日の活動で他の人の気持ちや感じたことがわかりましたか、⑤今日の活動は、あなたのためになりましたか、⑥このような活動をまたしたいと思いますか。回答の設定は、「4:とても、3:まあまあ、2:どちらもない、1:あまり」の4段階である。II感想文=今日の活動をふりかえり、思ったことをかいてみましょう。

III グループの経過

1. 参加期待度と理由

◎10段階評定の参加期待度は、全員の平均(標準偏差)が5.85(SD=2.27)[①一日間参加者(以下①と略記)の平均5.07(SD=0.73), ②二日間参加者(以下②と略記)の平均5.60(SD=2.27), ③三日間参加者(以下③と略記)の平均6.31(SD=2.67)]である。

◎参加理由はTable 2の通りである。

2. グループ・プロセス

1) 一日目(参加数51名: ①13名, ②9名, ③29名)

●オリエンテーション(09:30-10:20)

①子ども達の印象は、夏のプログラムについて聞いた人が多く、かなり騒いでいる。②人数が多く、教室が狭く感じる。③FaとCoFaの自己紹介とSEGについて説明が行われる。そして、「自分に対して正直になること、

Table 2
参加理由

順	参加理由	①	②	③	計
1	友達をつくりたい	6	4	12	22
2	おもしろそう	3	0	8	11
3	先生から勧められて	2	2	5	9
4	友達に誘われて	1	2	3	6
5	休みにやることなく	2	2	1	5
合計		14	10	29	53

率直に話すこと、素直に聞くことが、参加者の態度として大事である」と参加態度について強調される。④質問を受けてから、参加者は、参加前の期待値と理由の記入が求められる。

●第1セッション (10:30-11:20)：導入 (自己と他者理解)

① Fa からの「3日間参加したら一番いい体験ができるけど、欠席してもかまいません。」という導入の発言がある。②『歩き回り』と『2人1組でマッサージ』が行われる。③『質問ジャンケン』が行われる。エクササイズの最後に Fa が、「異性ともインタビューをしてね。」と指示する。若干戸惑った雰囲気が見れる。それで、CoFa が乗れない子どもに声をかけたりしながら介入する。④『8人組でネームゲーム』が行われる。⑤8人組でシェアリングが行われる。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ①友達をすこし分かるようになって、嬉しかった。／おもしろくていい経験になりそう。／先輩に会って、おもしろかった。／男の子と話したとき、恥ずかしかった。／自信感が生じた。／等。②友達の得意なことと好きなことについて分かるようになった。／いろんな友だちがいるらしい。／男の子の前でも恥ずかしくなかった。／等。③友達をより理解するようになった。／よく知らない友達を知るようになって、嬉しかった。／先輩の行動を見て、性格が少し分かった。／異性には恥ずかしい思いがある。／等。

●第2セッション (11:30-12:20)：友だちを頼りに (信頼感と安全感)

① Fa から「友達をどのくらい信じていますか。」との発言から、活動の説明が行われる。②友だちを案内する方法について話し合う。③『ブラインド・ウォーク』が役割交代で行われる。④目を閉じたとき、案内されたときの気持ちを分かち合う。とても新鮮な体験ができたように見えるし、にぎやかな雰囲気になる。⑤ Fa から「寒いけど、みんな良くがんばりました。」と発言があり、終わる。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ①盲人がかわいそう。／友達が不安そうな様子を見て、すまなかった。／友達がいたずらして、怒った。／より友達を信じてみよう。／等。②友達を信じられなかったことが、済まなかった。／友達が良く案内してくれて、ありがたい。／友達を信じることは大事だ。／等。③友達を信じてみてよかった。／自分は友達を信じていないことを感じた。／これから、友達をたすけてあげよう。／人を信ずることは難しい。／等。

★ Fa と CoFa の感想

Fa： メンバーの数が多すぎると運営しにくいと思った。また、大人数に対する伝える方法について工夫す

べきだと思った。さらに、1回出席してから欠席する人に対する扱いの方法はないかと。一日目は思ったよりよく動いていると見えた。子どもの熱意が見え、私の意欲ももっと生じるようになった。

CoFa (男)： 子ども達が自分の感じたことについて話すのが足りないと思った。活動内容の構成はよくできていると思い、男の子より女の子たちの反応がよりいいではないかと思われる。友達に関する概念がほとんどなかったと思われるが、今度の機会でも子ども達が他人の好みと性格について考えてみる機会になったと思われる。

CoFa (女)： エクササイズの説明をより詳しくしてほしい。良い経験になったと思われるが、友達の安全と命に対する責任があることをもっと強調したら。

2) 二日目 (参加数38名：①1名、②8名、③29名)

●第3セッション (09:30-10:20)：自分の願い (他者理解、自己主張)

①挨拶と新しくきた友達の紹介が行われる。Fa から昨日行われたセッションを繰り返して説明が行われる。又、SEG の参加態度が強調される。② CoFa のデモンストレーションがあつてから、『紙つぶって (ノー)』と『ノー、アイ・アム・アイ』が行われる。途中 Fa がいたずらしている子に対して、丁寧な説明がある。③ CoFa の演技があつてから、3人組で『自分の願い』が3回行われる。④3人でシェアリングが行われる。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ①断ったりお願いしたりして良かったが、友達の反応がよくなかった。／②友達に断ったり、お願いしたりすることがやさしかった。／断る力が生じた。／断るとき、親切に。／友達が自分を良く理解しているらしい。／等。③お願いと断るのも難しい。／この活動で、友達をつくる自信が生じた。／「ノー」と叫びながら紙を投げると、気持ちがすっきりした。／断ってもいいことが分かった。／等。

●第4セッション (10:30-11:20)：みんなは一人のために (協調性と信頼感形成)

①「もうすぐクリスマスですから、教室でクリスマスツリーを飾りましょう。」と Fa が言うと、わくわくしている様子。教室で『クリスマスツリー』が行われる。②運動場で4組に分かれ、『カムオン』ゲームが行われる。外が寒くて、2回目で終わる。③教室に戻って、力を合わせた時の気持ちや負けたときの気持ちを中心に分かち合う。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ①友達が大切だと思った。／②負けても楽しかった。／一番面白かった。／自分は、友達にあまり文句言わない。／友達が自分のために、何回も助けてくれた。／等。③一人の友達を助けるのが、難しかった。／協同すると親しくなることが分かった。／友達の気持

ちがわかった。／僕も友達を助けることができる。／等。

●第5セッション(11:30-12:20):話を聞こう(他者理解, 傾聴訓練)

① CoFa(男)により、『船長話』が行われる。ほとんどの子どもがゲームに乗っている様子。② FaとCoFa(女)の間に、三つの聴き方についての演技が行われる。③『話を聞こう』が行われる。聞き方は、話にまったく反応しないこと、相づちだけすること、話に声や態度で賛同することの演技が求められる。④聞いてもらえることの楽しさや喜びを分かち合う。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ①友達と親しくなっていて嬉しかった。友達の話が聞きやすかった。／②話を聞いてくれてありがたかった。／友達が話を良く聞いてくれると、良い人だと思われる。／等。③もうちょっと聞いてあげようと思った。／友達の話を良く聞くと、友だちについて分かるようになった。／後輩の聞き方が上手だった。／等。

★ FaとCoFaの感想

Fa: 子ども達の状況をきちんと把握することが大事だ。子どもの様子による運営の多様性を常に考えておいたほうが良い。ほめることに積極的に。子ども達がよく従ってくれてありがたいと思った。説明する言葉の難易度を考慮する必要がある。注意を集中させる技術の開発も必要。目標認知を正確にすること。

CoFa(男): 初等教育は、楽しい活動を目的に合わせ、どう生かすのが大事なことだと思う。人に断れることに対する怖さが大きく見られた。そして、断れたときの説得する技術をより開発すべきだと思った。

CoFa(女): プログラムが面白くて、意味がある内容だった。Faのリーダーも良かった。子ども達も楽しく過ごしているらしい。昨日より、自分が参加できないと判断した人たちが欠席したかもしれないが、自発的に参加しているらしい。ひとつのプログラムを深くするのが良いか、いろいろなことを経験させる方がいいのかがまだ判断できない。

3) 三日目(参加人数32名:①0名, ②3名, ③29名)

●第6セッション(09:30-10:20):無言絵描き(自己と他者理解)

① Faから「今日まで、よくがんばって来ましたね。」という挨拶と、SEGの参加態度が強調され、『友達を励ます』という活動が行われる。② Faが紙棒を持って行動することを見ながら答える『なんだろうゲーム』が行われる。③言葉を使わずに、『生年月日』順に並べられ、5-6人組になる。④『無言絵描き』が行われる。「木、家、川を入れてください。」というFaの指示に従う。⑤相手の考えがわかったときの気持ちを分かち合う。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ②よく知らない子と話ができた。／言葉

を使わず、伝えることが苦手。／自分の考えを表現することに自信が生じた。／③友達と協同すると、とてもおもしろかった。／話さなくても考えが伝わるのがわかってきた。／話はしなかったが、少し親しくなったような気がする。／絵だけで友達の心を理解するのが難しかった。／等。

●第7セッション(10:30-11:20):自分をほめよう(自己理解, 自尊感情を高める。)

① Faから前の活動が、友達と付き合うとき、どんな関連があることについて説明が行われる。②「私は、一生懸命勉強しています。……だから、『まじめ』という賞を自分にあげたい」というFaからの自己開示がある。③5-6人組に分かれ、『がんばったことベスト5』、『自分の賞状』、『自分への手紙』が行われる。④組別に一人が選ばれ、全体の前で発表が行われる。⑤「自分と友達をもっと大事にしてね。」というFaの発言が終わってから、組別に活動について感じたことを分かち合う。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ②自分をほめると気持ちがよくなった。／自分を信じるのが大事だ。／自分の長所と短所を分かるようになった。③恥ずかしい。／自分はほめることが多い。／頑張ったことが多い。／妹にもっとやさしく。／友達を良く知るようになり、みんな長所が多いが分かった。／等。

●第8セッション(11:30-12:20):別れの花束(自尊心を高めよう, 暖かな人間関係づくり)

①「最後の時間ですね。友達にプレゼントをたくさんあげましょう。」とFaから発言がある。②「よくがんばった」とお互いに声かけながら握手が行われる。③前回と同じ組で『別れの花束』が行われる。④「たくさん手紙をもらった人もいますね。私ももらって、すごく気持ちいいですね。」とFaの発言があり、感じたことについて分かち合う。

◎自己評価 Table 5 参照。Fig.1-3 参照。

◎自由記述 ②友達にいい感情が多い。／別れるのが悲しいが、会えなくても友だち。／10人の友だちから、手紙をもらってとても嬉しかった。／③友達をほめる方法を習った。／三日間、短い時間だったけど、友達と友情が生じたと思う。／ほめられたことも多いし、これからはがんばろうと思う。／友達ともっと仲良くできる自信がある。／自分と友達について分かるようになった。／手紙を読むと、とても嬉しかった。／等。

●別れの会(12:20-12:40)

① Faから、今回のプログラムのまとめがあり、「今回をきっかけで友達ともっと仲良くしてね。」という発言がある。②メンバーに参加後の感想を書くことが求められる。③修了式には教頭先生が出席され、一言終えた後、子ども1人1人に対し、修了証とともに励ましの言葉が

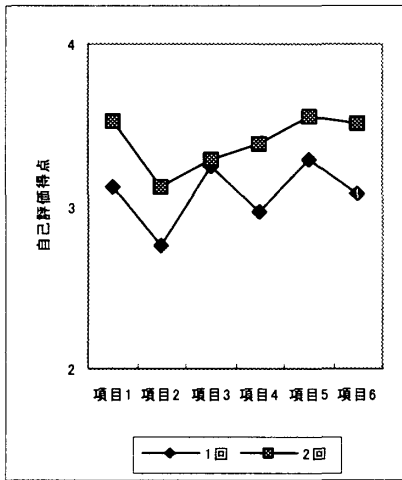


Fig. 1 一日目の自己評価の変化

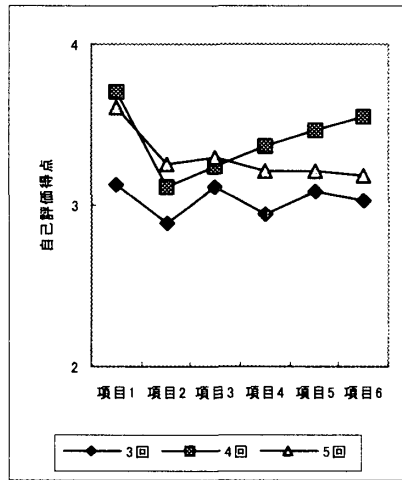


Fig. 2 二日目の自己評価の変化

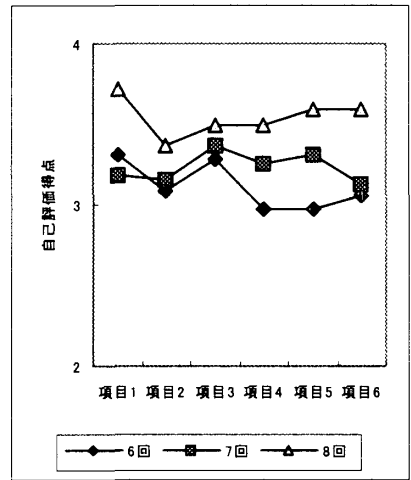


Fig. 3 三日目の自己評価の変化

伝えられる。④別れの挨拶と握手，教室の整理が行われる。

★Fa と CoFa の感想

Fa： かなり安定している様子だった。ある程度の信頼感と親密な関係もできているみたい。最後にいかにもとめるかについてあせている自分を発見した。子ども達は，自分について考えている時間が多くなったように感じた。そして，友達に関しても，かなり配慮している様子も見えてきた。別れの会が終わったとき，惜しい気持ちが強くて，涙を耐えられなかった。

CoFa (男)： 最後の日になって，子ども同士の間と子どもと教師間に安全感と親密性ができたように見えた。子ども達の情緒が安定されていることが感じられる。教師の親切は，情緒的な安定感を与えると思われるが，統制にむずかしい。しかし，基本的な姿勢としては親切が大事だ。

CoFa (女)： 雰囲気は最初よりかなり安定されてい

るらしい。昨日は休みだったが，子ども達が参加する様子を見ると，自分なりの意味を持ったように思われた。プログラムが一つ一つ意味があるらしい。進み方も順調。子どもも楽しくすごしていると思われる。

3. 参加後の満足度

◎10段階評定の満足度は，全員の平均（標準偏差）が8.40 (SD=2.36) [①平均5.79 (SD=2.86)，②平均8.60 (SD=1.84)，③平均9.57 (SD=0.78)] 多重比較では，①<②：F(1,51)=4.57, P<.001***, ①<③：F(1,51)=2.42, P<.001***]である。

◎自由記述 Table 3 参照

4. フォローアップ

◎10段階評定のフォローアップは，全員の平均（標準偏差）が7.13 (SD=2.18) [①平均5.86 (SD=2.14)，②平均7.80 (SD=1.99)，③平均7.52 (SD=2.08)] 多重比較で

Table 3 参加後の感想

順	参加後の感想	①	②	③	計
1	友達と仲良くなった	2	1	19	22
2	友達を作る自信ができた	3	5	2	10
3	友達が大事だ	5	3	0	8
4	自分と友達の長所が分かった	0	0	6	6
5	友達の性格が分かった	0	0	2	2
6	まだ自信がない	2	0	0	2
7	無記入	2	1	0	3
合計		14	10	29	53

Table 4 フォローアップの感想 (N=53)

項目	フォローアップの感想	①	②	③	計
1	友達と仲良く過ごしている	12	7	22	41
	友達に	0	3	5	8
	友達について	0	0	1	1
2	友達が	2	0	1	3
	自分を大切にしている	12	8	25	45
	自分に	0	2	1	3
3	よく発表している	0	0	1	1
	話を良く聞いている	0	0	1	1
	あまり	2	0	2	4

は、①<②：F(1,51)=4.02, P<.10+, ①<③：F(1,51)=3.30, P<.05*]である。

◎自由記述は、友達と自分について書くようになって
いる (Table 4 参照)。

IV 考 察

本実践をとおして、以下のような諸問題が考えられた。

1. グループ構成に関して

(1) SEGの説明について

Table 5
3日間の自己評価得点の変化

時間	セッション	参加日数 (人数)	項目 1 活動の楽しさ	項目 2 自分の 感じを言う	項目 3 他人の 話を聞く	項目 4 他人の 感じが分かる	項目 5 自分の 役にたつ	項目 6 またしたい
一 日 目	1 回	一日間(13)	2.54(0.97)	2.69(0.75)	3.31(0.48)	2.81(0.99)	3.00(1.22)	2.69(1.38)
		二日間(9)	3.44(1.01)	2.56(0.88)	3.44(1.01)	2.89(0.69)	3.22(0.97)	2.89(1.27)
		三日間(29)	3.28(0.88)	2.86(0.88)	3.17(0.85)	3.03(0.98)	3.45(0.87)	3.31(0.93)
		全 体(51)	3.12(0.97)	2.76(0.84)	3.25(0.80)	2.96(0.92)	3.29(0.99)	3.08(1.13)
	2 回	一日間(13)	2.92(0.95)	2.69(0.75)	3.31(0.48)	3.15(0.99)	3.46(0.88)	3.15(1.14)
		二日間(9)	3.56(0.73)	3.33(0.87)	3.11(0.93)	3.33(0.71)	3.33(0.71)	3.33(1.00)
		三日間(29)	3.79(0.49)	3.24(0.83)	3.34(0.77)	3.52(0.87)	3.66(0.61)	3.72(0.70)
		全 体(51)	3.53(0.76)	3.12(0.84)	3.29(0.73)	3.39(0.87)	3.55(0.70)	3.51(0.90)
	3 回	一日間(1)	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
		二日間(8)	2.63(0.74)	2.50(1.07)	3.13(0.99)	2.87(0.83)	3.00(0.93)	2.75(1.04)
		三日間(29)	3.34(0.90)	3.03(0.82)	3.17(0.80)	3.03(0.98)	3.17(0.97)	3.17(1.04)
		全 体(38)	3.13(0.96)	2.89(0.89)	3.11(0.89)	2.95(0.98)	3.08(1.00)	3.03(1.08)
二 日 目	4 回	一日間(1)	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
		二日間(8)	3.75(0.71)	3.00(0.93)	3.25(1.04)	3.50(0.70)	3.75(0.71)	3.63(0.74)
		三日間(29)	3.72(0.53)	3.14(0.83)	3.24(0.76)	3.34(0.72)	3.41(0.68)	3.55(0.78)
		全 体(38)	3.71(0.57)	3.11(0.83)	3.24(0.82)	3.37(0.71)	3.47(0.69)	3.55(0.76)
5 回	一日間(1)	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	
	二日間(8)	4.00(0.00)	3.87(0.35)	3.50(0.76)	3.25(1.04)	3.87(0.35)	3.63(0.52)	
	三日間(29)	3.51(0.74)	3.10(0.90)	3.21(0.86)	3.21(0.73)	3.03(0.87)	3.07(0.96)	
	全 体(38)	3.61(0.68)	3.26(0.86)	3.29(0.84)	3.21(0.78)	3.21(0.84)	3.18(0.90)	
6 回	一日間(0)							
	二日間(3)	3.33(0.58)	3.00(1.00)	3.33(0.58)	3.00(1.00)	2.67(0.58)	2.67(1.15)	
	三日間(29)	3.31(0.93)	3.10(0.90)	3.28(0.70)	2.97(1.02)	3.00(0.96)	3.10(1.14)	
	全 体(32)	3.31(0.90)	3.09(0.89)	3.28(0.68)	2.97(1.00)	2.97(0.93)	3.06(1.14)	
三 日 目	7 回	一日間(0)						
		二日間(3)	3.33(0.58)	2.67(0.58)	3.00(0.00)	3.00(0.00)	2.67(0.58)	2.67(0.58)
		三日間(29)	3.17(0.97)	3.21(0.98)	3.41(0.73)	3.28(0.92)	3.38(0.90)	3.17(1.00)
		全 体(32)	3.19(0.93)	3.16(0.95)	3.37(0.71)	3.25(0.88)	3.31(0.90)	3.13(0.98)
8 回	一日間(0)							
	二日間(3)	3.67(0.58)	3.33(0.58)	3.33(0.58)	3.33(0.58)	3.00(1.00)	3.00(0.00)	
	三日間(29)	3.72(0.53)	3.38(0.78)	3.52(0.69)	3.52(0.74)	3.66(0.61)	3.66(0.67)	
	全 体(32)	3.72(0.52)	3.37(0.75)	3.50(0.72)	3.50(0.72)	3.59(0.67)	3.59(0.67)	

SEGの説明に関しては、<SEG実施までの経緯>のところで示したように行った。しかし、案内状の『自分を見つめ、友達と知り合い、たくさんの友達をつくりましょう』という内容より、前回参加した子ども達の話(くちコミ)が非常に大きな影響を与えたと思われる。参加理由の中で、先生からの勧めと友達からの勧めが多いことから伺える。その内容は、先生から「遊ぶことだ」、友達から「おもしろい」と言われて、参加した子が多い。ということは、学期以外のことは『遊び』という認識がもとにあると考えられる。

このようなことから、多くの人数が集まるようになった。しかし、このように集まることは、自分の期待と違う時に欠席率が高いことが予想される。従って、グループの安定感形成にも悪い影響を与えると思われる。よって、SEGの認識があまり定着されていない韓国の教師たちに、広報する機会を各教育センターがつくることと、各教師たちが子ども達をもっと理解するための方法としてSEGについて、積極的に研修することが必要であると思われる。

(2) 実施時期による考慮について

今回のグループは、一番寒いと言われている12月末に行われた。それで、使われた教室の中にストーブを設置しなければならなかった。それは、活動する場所が狭くなることを意味する。グループが行われた学校は講堂も、プレイルームのような広い場所もなかったため、25坪くらいの教室を使うしかなかった。それに加えて、今回50人以上が集まることで、子ども達の騒ぎを止めることと火気安全に、大変気を使うようになった。

また、外の活動をできるだけ減らすため、プログラムの構成を考える必要があった。よって、夏のグループ(金, 2002b)とは違って、一日目の『ブラインドウォーク』の時間を減らして話し合う時間を増やすことと、二日目の『クリスマスツリー』の活動を教室中でゲームを通して実際、壁に飾る活動に代えた。そして、休憩時間に教室中で、少しでも体を暖める工夫が必要であった。

よって、今後冬に行うためには、子ども達が自由に動ける場所と環境を備えることと、季節に合うプログラムの構成が重要な課題であると考えられる。

(3) 実施期間の長さについて

今回のグループは、12月21日(金)～24日(月)の3日間であった。ということは、日曜日が挟まれていることと、クリスマス連休が重なっていることである。夏休みとは違って、非常に家庭のイベントが多い難しい時期である。よって、欠席率は予想できることであった。

そして、韓国の小学校では、休みの真ん中で掃除日があった場合も、半分以下であることが普通で、日程を調整することが難しくなった。しかし、結果的に満足度(①<②: P<.001***, ①<③: P<.001***)とフォロー

アップ(①<②: P<.10+, ①<③: P<.05*)で二日間と3日間参加した子どもが、一日間参加した子どもより高かったことから、少なくとも二日間が連続になったことがグループの展開に影響を与えたと考えられる。

今回のグループを通して、2学期制の韓国でもクリスマス連休、年末、新年等の変数により、冬に行うことが難しいことが分かった。しかし、二日間以上参加した子どもの体験を見ると、二日間以上のグループを企画しても、そのくらいの集中体験ができることが示唆された。

(4) コ・ファシリテーター方式の必要性について

今回のグループは、異学年と7学級から集まったメンバーと外部の教師達で構成されている。ということは、非常に異質性が高いグループであることを意味する。よって、ファシリテーターと子ども間、子ども間に理解し合うことが難しいし、相当の時間がかかることが伺える。それで、数人のコ・ファシリテーターが必要であることが考えられる。

野島・内田(2001)は、『コ・ファシリテーター方式』は、3種類の時間(プレ・ミーティング、共同グループ担当、ポスト・ミーティング)がワンセットになっている構造である。単にファシリテーターとコ・ファシリテーターが、共同でグループを担当するだけではない。3つが有機的につながっていることが大事である。』と述べている。今回のグループでも、グループの環境づくり、5セッションの前半担当、セッションの前後のミーティングを通して、子どもの参加状態の把握ができ、より円滑なグループの運営ができたと思われる。

コ・ファシリテーター役割においても、状況に応じて「観察者」「アシスタント」「メンバー」「ファシリテーター」と変化した(野島・内田, 2001)。今回のグループが自発的である特徴から、毎日人数が変わってくることでメンバーの役割をする場合が多かった。そして、二日目の3・5セッションで、デモンストレーションを2回するアシスタントの役割も果たすようになった。そこで、グループ中で起こる様々な様子について分かち合うことができ、グループについて全体的に分かるようになったと思われる。

このようなことから、今回のグループでは「コ・ファシリテーター方式」が有効であることが考えられる。小学校の現場で、「コ・ファシリテーター方式」の導入は、自分が担当している子どもについて理解が広がって深まるとともに、子どもの教育に対し教師同士が協力しあう雰囲気を作ることに貢献すると思われる。

2. グループ・プロセスに関して

(1) 一日間のみ参加した子どものフォローについて

今回のグループに一日間のみ参加した子どもは、14名であった。一日目は13名、二日目は1名であった。参加

前の期待度、参加後の満足度、フォローアップで一番低い得点を獲得している。それとは別に、セッションの自己評価では、一日目の1・2セッションは二・三日間参加した子どもとほとんど差がない。そして、二日目の子どもは、最初は低かったが、4・5セッションに得点が上がった。ということは、体験の当日は子ども達と楽しく体験ができ、いろいろなことを学ぶことができたと思われる。しかし、一日間のみ参加した子どもは、長い冬休みが経って、その一日の体験を忘れてしまったことが伺える。

しかし、子どもにとっては、自分の意志で一日間「自発的」に参加したことは、非常に意味があると思われる。それについて、Faと担任教師からのフォローが少なかったことから、満足度とフォローアップの結果がよくなかったと思われる。今後、オープン・グループのSEGを運営する時は、途中で来なくなった子どもとの連携を大事に扱う必要があると思われる。それは、グループの途中でほめることと、終わってから連携することは、その子ども達の学校生活に最もいい影響を与えらると思われる。

(2) ファシリテーション—自発性の強調—

今回のグループの形式は、自発参加のオープン・グループ、通い型（短期集中型）である。その中でも一番のキーワードは「自発参加」である。それで、ファシリテーションの中心も「自発性の強調」になった。そのことから、「3日間参加したら一番いい体験ができるけど、欠席してもかまいません。」というFaの発言がある。この発言が、非常に子ども達に動揺を起こせる原因になったと思われる。その結果、二日目と三日目に欠席する子ども(51名→38名→32名)が増えたのではないかと伺える。しかし、二日目から、グループの雰囲気が変わり、非常に安定できたと思われる(Fig.1, 2, 3参照)。

このような結果から、自発性を強調して子どもに考える時間を与えることは、両面性があると思われる。すなわち、欠席率が高くなる危険性と、グループの展開がもっと安定的に進むことが考えられる。「自発性の強調」をどのようにするかについての判断は、ファシリテーターにとっては非常に負担になると思われる。筆者は、最初集まった人数で判断する傾向がある。自分が担当できるようなグループの大きさをつくる目的があるかもしれない。しかし、このような判断は、各ファシリテーターによって違うと思われる。集まるグループの特徴をよく把握して、ファシリテーションの技法(野島, 2000b)を選択することが大事であると思われる。

VI おわりに

本研究では、グループ体験学習として、冬休みの「仲間づくり教室(SEG)」の運営を行った。この実践を通

じて見えてきた小学生対象の短期集中型SEG実施上におけるいくつかの諸問題について考察を試みた。今後の課題としては、これらの諸問題をどれだけ小学生特有のものとして取り扱うことができるか、また、短期集中型SEGの実施時期や方法の違いによって取り扱うべき諸問題がどのように異なってくるか、等について更なる検討を加えていくことが挙げられよう。

(付 記)

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました指導教官野島一彦先生と、九州大学大学院人間環境学研究院の高橋靖恵先生に深謝いたします。そして、協力して下さった韓国のD小学校校長先生と5・6年担任先生たちにも謝意を示します。

引用文献

- 鎌田道彦 2001 入学初期に必修授業として実施したエンカウンター・グループの効果の検討 人間性心理学研究, 19(2), 8-18。
- 加藤治代 2001 日本における構成的グループ研究の現状と課題—小学生対象研究を中心として 國分康孝(編) 続構成的グループ・エンカウンター 誠信書房, 91-104。
- 金 重大 1982 Encounter 集団に関する経験的接近 大邱大学校大学院社会事業学科 博士論文。
- 金 奎卓 2002a 韓・日のカウンセリング方法の比較研究 福岡教育大学心理教育相談研究, 6, 29-39。
- 金 奎卓 2002b 韓国の小学校における構成的エンカウンター・グループの有効性の検討 日本人間性心理学学会21回大会発表論文集, 78-79。
- 國分康孝編 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房。
- 國分康孝編 2001 続構成的グループ・エンカウンター 誠信書房。
- 野島一彦 2000a 日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開: 1970-1999 九州大学心理学研究, 1, 10-19。
- 野島一彦 2000b エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ。
- 野島一彦・内田和夫 2001 「コ・ファシリテーター方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 2, 43-51。
- 李 相路・李 炯徳 1971 行動変化のための小集団としての encounter 運動 慶北大学学生指導研究, 4, 31-46。